

景気変動理論についての一試論

——シユムペーターをめぐって——

浜 崎 正 規

- 一、はし が き
- 二、問題の提起
- 三、論理的な弱点
- 四、景気循環シユマの吟味
- 五、景気変動理論の構造的吟味
- 六、ち と が き

一、は し が き

シユムペーターの「経済発展の理論」[“Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung,” I Aufl., 1912] は

方法論的にどのような思考方法をとっているかは別としても、経済の認識原理としては、経済循環の均衡化

の過程が単なる限界概念ではなく、いわば存在概念として定立されていることを把握しなければならない。

そのことは彼が、発展過程を経済循環過程の軌道の変更過程とみることに、すなわち古い結合様式の均衡状態から新しい結合様式の均衡状態への展開過程と考えるところにしめされる。したがってわれわれは、均衡状態の運動過程を資本制生産の現実的發展過程として捉えることを心がける場合、彼が技術的論理的要請として『信用創造』を提起していることに注目する。すなわち経済の発展は、方法論的には背後における信用創造を媒介として達成されるものであり、他方、経済の

革新と結合して信用創造ということは、経済発展にもなう一連の現象——金本位制のもとにおける経済の昂揚、これにともなう物価騰貴の傾向、利潤、利子等の経済現象を説明する理論となつているのである。

さてこの小論の目的は、シュムペーターがいわば経済の変動過程を処理するに當つて、単なる均衡化の限界概念ではなく、いわゆる不均衡化のすべての過程において変動しつつある経済現象を、存在概念として定立することにあるとすれば、彼の「信用」概念の景気変動理論の分野における理論的ポーズが方法的に吟味されなければならないものである。このような意味合いから本稿は問題をしばつて (一)景気変動と貨幣的要因との関連にもとづく循環シニマの構造的分析に関する吟味、(二)変動理論構成の内在的論理性の明確化、吟味という課題にもとづいて問題をとりあげてみた。そのためにわれわれは左に挙げた諸論稿^{*}を中心に問題を展開してみることにしたのである。ともあれ単なる限界概念でなく存在概念として循環の均衡化が定立さ

れることは、もとより客観的現実に対してそれだけ発言権を許されるべきものであることを意味しなければならぬことは、もとよりいうまでもないことである。

だからといってシュムペーターのいわゆる変動分析の理論が、現実の経済分析の接近化を試みるに當つて肯定されたことになるとはもちろんいえない。理論的検証は、当然分析方法の正当性ということにかかわるものであるが、その事自体はまた現実の問題意識との関連において求められるものであろうし、また自ら客観的歴史性をはらんでいるものと考えられねばならない。ではシュムペーターの変動理論は、このような理論的検証にたえるものとしての意義を満足せしめるに価するかどうか、終局的な問となるであらう。われわれはそのための一里塚をここに吟味してみるにとどめるよりほかかない。

* (1) Rendigs Fels: "The Theory of Business Cycles," The Quarterly Journal of Economics vol. LXVI [1952]

(2) Nicholas Kaldor: "The Relation of Economic Gr-

owth and Cyclical Fluctuations,”

Economic Journal, No. 253 March [1954], vol. LXIV

(3) Clark Warburton, “Money and Business Fluctuation in the Schumpeterian System,” The Journal of Political Economy, LXI, December, [1953]

二、問題の提起

前にのべたように「経済発展の理論」の論理は、経済の静態的均衡の考察から発足している。ところで経済の静態的考察は、焦点を経済の不変的な、伝統的な循環にしている。経済静態的分析は、この不変的な経済循環において最善の状態と均衡している財貨諸量の相互依存関係を価格、価値の視角からとらえ、いわば価値帰属の理論によって、財貨の価格および価値が最終の生産諸要素に吸収しつくされることを説明する。そうして価値帰属の理論によって財貨の価格、価値が最終の生産諸要素に吸収されることが説明されるとき、静態における経済の循環は、理論的に説明されることとなるのである。

「経済発展の理論」によれば、この静的な国民経済のうちから企業者があらわれ、新結合を實現して、経済は発展することとなっている。その論理はいわゆる企業者の生産要素の新結合によって、価格、および価値関係が革新され、従来の経済循環の軌道は、打ち破られることになり、そうして企業者による経済の革新によって、利潤、利子が打ち出されてくることである。

ところで「経済発展の理論」では、静態において利潤はなく、貨幣資本の蓄積はないのであるから、経済発展の動因である企業者が新結合を達成するための手段である貨幣資本の蓄積はないこととなる。ここに「発展の理論」における論理的な不統一が先ず指摘されるわけであり、また論理的な二元性を看取することができるのである。すなわち「発展の理論」における静態理論は、経済の不変的な循環を対象とし、動態理論は経済循環の革新と発展とを対象とし、その間にはさらに高位の経済概念にもとづく統一がなされていないということができる。^{*}

そこで静的な国民経済のうちからあらわれる企業者が新結合を達成するためには、外部から資本を導入しなければならなくなる。したがってシユムペーターがいうように動態理論では信用創造は、いわば企業者にとって「新結合の遂行のための典型的な金融の源泉であり、かつ先行せる発展の諸結果が事実上それぞれ瞬間に存しない場合には、殆んど唯一の金融源泉となるべきものである。」(中山、東畑訳書一八〇頁)ところがこの信用創造は、銀行が特に広義の対人信用を与え、無から創造された (*aus dem Nichts schaffen*) 追加購買力となって機能する信用貨幣を創造するときに行われるとされている。すなわち換言すれば「発展の理論」では信用創造は、経済の静態と動態とを結合するための論理的要請となっているということができ

る。ところで動態理論における信用創造の理論は、静態と動態とを無媒介的に結合するためにつきのような二つの問題を提起することとなっている。すなわち、(一)企業者はいかにして静態的条件のもとで必然的に生産手段を所有するにいたるのか、(二)あらゆる生産手段が結合されそうしてまた、いわゆる銀行の創造された信用がいかにして唯一の金融可能性をもつものであるという承認に到達することになるのか、がそれである。さて前者は、前にものべたよう信用創造が、無から企業者に新結合のための手段としての追加購買力、すなわち貨幣資本を与えることとなっているため企業者は、あたかも資本の私的所有から解放されているかのごとくみえてくるということである。このことからして資本主義的発展というのは、まさにこのような信用創造にもとづくものようにあることである。ただしシユムペーターは、信用創造の窮極の限界をなすものは、金本位制を前提としているから銀行資本としての金の蓄蔵量にあるとしているが、次に後者については、まさにシユムペーターは、添加信用以外に他の金融可能性を認めず、彼にとつては信用は常に創造的となつてあらわれる。しかしながら、はたして信用がそのように生産的、創造的であることは、どのような証明にお

いていうことが出来るのかこの点についてもシユムベクターは何もふれていない。^{*＊}

ともかくこのように発展と結合している信用創造は、不可避免的に、物価騰貴の傾向を招来することになるのである。すなわち企業者が静態的国民経済のうちからあらわれることになっているところから、いわば最善の状態で均衡している静態経済に銀行の信用創造によって供与された追加購買力をもって企業者は市場にあらわれ、新結合のための生産要素を購入する。このことから需要は、供給に比して増加し、物価騰貴の傾向が必然的に招来することになる。この意味にもとずいて「発展の理論」における信用創造の理論は、一方では、物価騰貴を基礎として強制貯蓄の理論を打ち出し、しかも他方では、信用創造——物価騰貴——輸入の増加——金の流出——金融引締めという論理をいわば不可避免的にたどることとなる。

われわれは、以上のことを以下の論述の足場として二、三の学者のシユムベクターの景気変動理論に対す

る見解をめぐりながら景気変動と貨幣的要因との関連についての考察を深めてみよう。しかしながらそれらの批判といえどももちろんわれわれが前に問題設定として挙げた二つの提起にかかわるものとして理解を深められなければならないことはいうまでもない。またそのことは、シユムベクター学説自体への深い方法論的批判ともなりうるものであることはいうまでもないことである。

* このことは一面山部氏のような見解からも指摘できるであらう。『独占と競争』——シユムベクターについて——山部徳雄著（三田学会雑誌）第四十六卷、第一号）

すなわちシユムベクターが経済的革新による経済的変動の現象面をきめて樂觀的に構想していることからもし「仮に創造的破壊 (creative destruction) が生じないとすれば経済は一般均衡のモデルの適合する循環過程において安定するであろうとなす可能性が多多存する。シユムベクターはこの点如何なる見解を以ていたか問題はこれである。」このことから山部氏は、「企業の技術的組織的進歩の過程は市場の構造を变革してゆく過程である。経済的革新がなくなれば、独占利潤は消滅し、完全競争を前提とする一般均衡が成立するという論は余りに早計である」ことになる。従ってもしこのような観点から静態

理論と動徳理論との理論的統一が問題とされるならば、当然「市場横造」の分析をもって始めて経済的統一は達せられることになるのであらう。

* * 龔健「教授は『信用創造理論の研究』においてこの点について現存の貨幣基礎よりも、更にまた現存の財貨基礎よりも遥かに大なる信用授与があること、そしてこの意味において『銀行は購買力という商品の生産者である』ことがかれのいうように（シユムペーターをさす）事実として何人も疑い得ないところであるにしても、その可能性ならびに必然性に対する理論的究明が等閑視される理由はない」と述べて同様に指摘しておられる。

三、論理的な弱点

さてシユムペーターにあっては、信用はなるほど二つの理由から生産的であった。すなわち

(一) 資本主義におけるヴェールとしての機能において、したがって企業者による生産手段の転用

(Andersverwendung des Produktionsmittelvermögens) の結果によつて

(二) この過程にあって第二の現象、いわば副次的現象が生ずることによつて、すなわち強制節約が生

ずることによつて、

ところで信用は、企業者が生産手段の転用のための本源的第一次的機能を満した後において企業者によつて直ちに帰算されるのではない。それは支払手段として循環に入りこみ、循環の中にあつて価格を高位に保ち、或る種の所得者に対して強制節約をなさしめるのである。

しかしながらここにシユムペーターの解き得ない問題が生ずるのであつた。前にふれたように、よりよき結合の結果（質的・量的にも）生産増加が生ずることにより、当然価格騰貴をまねくいたり収入の購買力が減ずるのである。そうして減少した消費の代りに強制節約の程度に應ずる生産過剰が生ずる。この生産手段の過剰生産は、しかし新結合の高い生産性を達せしめると同様に、また過剰消費を要求する。この問題がどのように解決されるか、またどのようにして購買力のある収入が生ずるかということについては、シユムペーターはならん解答を与えていない。しかしながら

このことは、恐慌の出現、すなわち不比例性の発現に對して異つた結論を与えることになるのである。けれどもシユムペーターの理論は、全く景氣膨脹の理論であつて、彼の場合企業者は、その利潤が大であつても、それを或部分の人の縮減された消費目的に用いることもなければ、蓄積に用いることもしないで、いわば信用の返済にあるものとするこゝとによつて、問題を一層困難なものにしていくことができる。もし企業者は、信用を返済しないといふこと、また新結合の金融は、創造された購買力によつてなされるのではないといふこと、その結果利潤は蓄積に用いられるといふことを、承認するならば、問題解決の道は存するであらう。しかしながらシユムペーターの理論は、出発点においてかような道行きをとることをえなせなかつたのである。

いまわれわれは、フニルス教授の論稿にしたがつてシユムペーターの論理的道行を景氣理論上に浮ばして把えてみることにする。

ところで教授は景氣理論問題については、G・ハーバー(Godfried Harberler) 教授の "Prosperity and Depression," Ist ed.: Geneva, 1937 以来大く大別して四つに分類することが出来るといふ。
一、貯蓄投資の理論形式による発展型態

Ray F. Harrod, "The Trade Cycle: An Essay," (Oxford, 1936)

Michael Kalecki, "Essays in the Theory of Economic Fluctuation," (New York, 1939), chap. 6

M. Kalecki, "Studies in Economic Dynamics," (London, 1943) chap. 4

Nicholas Kaldor, "A model of the Trade Cycle," Economic Journal, March, 1940, pp. 78—92.

Lloyd A. Metzler, "The Nature and Stability of Inventory Cycles," The Review of Economic Statistics,

August, 1941, pp. 113—129.

Arthur F. Burns and Wesley C. Mitchell,

“Factors Governing the Length of Inventory Cycles,” *The Review of Economics and Statistics*, Feb, 1947, pp. 1—15.

“Measuring Business Cycles,” (New York 1946) 四 シェムベーターの一九三九年の著 “Business Cycles; A Theoretical, Historical and Statistical

John R. Hicks, “A Contribution to the Theory of the Trade Cycle,” (Oxford, 1950)

Analysis of the Capitalist Process,” (New York) 2 vols の二章から四章に於たる根本的な理論の表現形式。

二 計量経済学者による構造的均衡体系の型

1950)

以上われわれは、フェルス教授の分類を紹介したのであるが、その四つの分類のそれぞれのもつ方法的

J. Tinbergen, “Business Cycle in the U. S. A.,” 1919—32” (Geneva, 1939)

差異は問わなうとしても、ともかくN・カルドアがいふような、いわば「景気循環の問題についての端緒的研究以来、経済体系の循環的変動は本質的に経済生長の動態的過程に根本的に関連したものととして考察されてきているという事はできなう」というところの公

Colin Clark, “A System of Equations Explaining the United States Trade Cycle, 1921 to 1941.”

分母はその四つの分類のそれぞれにとらえることができるであらう。というのはそこに、二つの理由が承認

Econometrica, April, 1949, pp. 93—124.

われわれを得ないからである。先ず第一に循環についてマルクス・アフトリョオン (Aftalion) シェピトホ

三 国民経済研究所 (The National Bureau of Economic Research) の景気循環の調査方法

てマルクス・アフトリョオン (Aftalion) シェピトホ

フ (Spichholz) 或はホブソン (J. A. Hobson) のようないわば初期の学者でさえ承認せざるを得なかつた投資過程の重要な役割についての強調であり、周期的動向における生産能力の生長についての関心である。

今一つの理由は、すなわち循環と動的変動との間の厳密な結合が客観的に把握されるものであるということである。このことを具体的にいえば、例えば十九世紀以来の歴史的發展が多くの場合、鉄道、電気及び自動車のような明らかにすぐれた技術的革新の搾現に関連しているということである。

ではこのような二つの理由を、シユムペーターはどのような論理過程から承認し、そうして自己の理論体系化に努力しているか。またカルドアのいうような意味での公分母は、シユムペーターの景気理論の組成の表面には、どのような形態として現れているかが次の問題設定となるのである。

われわれはこの点について、先ず最初にフェルス教授の論稿をめぐって循環の論理を具体的に把握し、次

にワトソン教授の所論を通じてカルドアがどのような公分母をシユムペーターにみいだしこの問題設定の理解に当てることにする。

四、景気循環シユマの吟味

ところでシユムペーターは、経済進歩の副産物を簡結に循環自体を構成するものとして、景気循環理論の前提に提出する。すなわち経済進歩が、資本主義社会においてとりあげられる形いわばブームや不況は、その経済進歩の副産物である。したがってこのことは、シユムペーターによれば、革新の現実化が一般的経済的趨勢にある場合、指導的革新的企業者による革新の採用は、投資景気に萌芽しつつある多くの横倣者によって採り入れられてゆくことからして一時またれねばならないことになる。かようにして、革新が完全に搾現された場合、或いは搾現超の場合に、経済は今一度沈滞へより一層後もどりすることとなる。このように、循環と動的変動との間の原因的関連について論理的明

確きを欲するシムムベーター理論は、果して真に分析的であるということができらるであらうか。なるほど彼の理論的構想が循環を説明するためには、革新自体によって万足すべきであるという要素を理論的に統一することが必要である。もしそうでなかったならば、われわれは総体としてのシムムベーター理論を一つのモデルに構成することは、全く不可能なことであるであらう。^{*}

また革新の創造者および模倣者についてあるいは、技術的進歩の概念についてさえ、シムムベーター自身の理論的足場としての武器に訴えることしないでは、理論を一つの体系として構成することは、困難であるといわねばならない。しかしながらわれわれは、ここに一つの根本的な批判が存するのを看過できないであらう。すなわちS・S・クズネツ(Simon S. Kuznets)教授によれば、シムムベーターの経済理論は、根本的要因および概念(すなわち企業者、革新、及び均衡軌道等)の間の必然的連関を考察することに失敗してい

るということである。クズネツ教授がこのように批判をする根本的意図は、もちろんシムムベーターの理論が所得、財貨生産者および雇傭理論になんら結合をもたないというところにその处在があった。この点については、すでにベニオン(E. G. Bennion)教授による論稿『シムムベーターおよびケインズ理論における雇傭』“Unemployment in the Theories of Schumpeter and Keynes” American Economic Review, June, 1943, pp. 336—347 によってケインズの理論装置にもとずく修正がなされているといわれている。がしかしながらこの点についてカルドア教授は次のようにのべている。すなわち「シムムベーター理論にとって本源的である革新的投資の必然的な群生のためには、ケインズ理論の乗数およびoutput-investmentの関連による或る種の変体を導入しなければ完全に説明することは出来ない」と。たしかにケインズの一般理論によって導かれた景気循環理論の展開は、明らかに循環および動態的成長が本来分析的に結合をされてい

るといふ考えに対しては、積極的に反対であることを示している。すなわちその考えからすれば循環は、単なる副産物であるし、いわば進歩の欠如においては、循環は何ら起きることができないといふ考えであるからである。

このようにしてクズネッツ教授、カルドア教授共に表現は異なるけれどもシユムペーターの論理性の欠陥を衝いた見解といふことができよう。ところで現在のわれわれの目的は、もとよりシユムペーター学説をケインズの「一般理論」の装置によつて修正化することの論議を考察するのが目的ではなかつた。^{*※}

次にわれわれは、クズネッツ教授がシユムペーター教授の景気理論について指摘した第二の点すなわち国民経済研究所によつて区別された景気のピークおよびトールフとシユムペーター理論の周期的状態との間に明白な関連性が存在しないといふことについての問題設定からシユムペーターのそれを考察し批判をくわえてみることにする。ところでシユムペーターは、景

気循環を統計解析的には、約四十カ月周期のキチン(Kitchin)の短期波動、約八十九年周期のジュグラ(Juglar)の中期波動、および約五十一六十年周期のコンドラチーフ(Kondratieff)の長期波動の重合、干渉をもつてしたのである。しかしながらこの三つのモデルにもとづく解析的説明は、彼の場合はきわめていわば、分析のための便宜きにもとづくものであつたといわなければならない。というのは、例えばシユムペーターは一九三二年の夏における沈滞の底を決定したのであるが、それは、国民経済研究所がトールフでもつて意味すると同じ事情について仮定的に意味するものであり、フェルス教授は、この点について次のように説明する。「周期的状態についてのシユムペーターの日附決定は、その場合コンドラチーフ、ジュグラであるいわ、キッチン波動等のいずれにも属さないものとして不景気の状態から回復への推移を観察したのであつた」と。今の場合その要因を説明する場合の相異はさておき、繁栄から不景気への推移に関するシユム

ペーターの日附決定を期待し、また不景気から回復へ、ならびにピークやトローフに関する研究所の日附を離れるためには、三つの理由をみいださねばならない。

すでに述べたように、まれに重合する彼の統計的解析的な三つのタイプの間には、いわゆる衝突・干渉が存在するということがある。すなわちわれわれは景気の停滞が第二の波動を破壊する以前にいくらかの時が経過することを期待することができるし、またその停滞が、所得および雇傭における downturn をもたらす以前に、いくらかの時が経過することを期待することができるのである。したがってシユムペーターは「初期的な回復は、取引活動のすべてのドル量の一層の収縮となんら矛盾しない」(“Business Cycles” II, p. 945)と信じたのである。ところで研究所によって区別されたピーク、トローフおよび周期的局面についての統計的技術的な有用さについては、何ら問題は存しないとしても、一つ問題が存在する。というのはシユムペーターのモデルの局面を加えて利用することは、有利で

あるかどうかということである。フェルス教授はこの点について、シユムペーターの三つの循環を修正することによって、答えは全く肯定的に提供されることとしている。そうして「二つの種類の turning point の問題を明瞭にすることを欲するし、そうしてその場合研究所の類型を前提におくことを欲するであろう」と述べているのである。

われわれはこのことに関して、クズネッツ教授のシユムペーター体系に対する今一つの批判を瞥見してみる必要があるであろう。すなわち教授は、シユムペーターが彼のモデルと共に統計的技術をもたなかったことを指摘した点である。このことは、およそシユムペーター理論の弱点をわれわれが三つの循環シユマに発見するのに困難を感じないのと軌を一にする。しかしながら厳密に言えばこのシユマは、彼の理論構成上欠くことをえない面ではない、といわなければならぬ。というのは彼のモデルは或る明確な数でもって特定化することをえない、いわば循環の多様性を含んでいる

からである。事実その期待は不特定な多くの数の循環についてである。しかしながらシムペーターは、前記のべたように丁度、三つの種類の循環波動——キチン、ジュグラおとびコンドラチーフ——があるように論議することは、最も便利であるという立場から一応三つのシエマをもつてしたのであった。ところがこの点についてフェルス教授は、シムペーターの理論はジュグラールについては、もつともであると直ちに同意できるがコンドラチーフ、キチン波動について同じようにいうことがはたしてできようかと問題を提起している。この点についてわれわれは以下教授の所論をうかがってみよう。

(4) コンドラチーフの場合

まずシムペーターが循環の多様性を期待するという点について彼は、このために三つの理由を与えているのである。(一)懐胎期 *gestation period* はいかなるものよりも *innovation* にとっての方が長期である。しかしながらこのことが、あるすぐれた程度において

コンドラチーフに適應する、ということを支持するものとは考えられないであろう。すなわち一八九七年から一九一四年にかけての *gestation period* は *innovation* をみいだすことは困難なことであろう。シムペーターの認識にしたがえばその *gestation period* は第三のコンドラチーフの繁榮の局面であった。(二)系統的類似を創造する循環の連続は、例えば鉄道のようなすぐれた *innovation* によって大いに惹起する。このことは、六十年循環に適應するし、そうして歴史上のいかばかりの反映であるところのかような循環は、真に現実的現象であることを立証するに充分ではある。しかしながらこの第二の理由は、コンドラチーフにシムペーターの四つの循環局面を適用することを正当化しなかつたのである。いわば循環史において、関連した集団のうちに生ずるかのようにジュグラールについて考察することは、有利であるという以上の何ものも意味しない、といわなければならない。(三)シムペーターの言葉を引証すれば、鉄道の布設が完成するに当っ

ては、窮極的な実施の間に長期を必要とするということである。ところで新しい生産機会は発展されねばならないし、他の事情は絶滅されねばならない。このことをより具体的に表現すれば、新しい都市は隆盛し、古い都市は衰え、そうして人口は移動せねばならない。このことは、またコンドラチーフに適應するし、そうして更に繁栄や景気の沈滞局面を包含するのである。

すなわち *innovation* や機会を展開する場合に繁栄は、*gestation period* を通じて進行しつつあるのであり、窮極的事情としての景気の沈滞は、古い生産を滅亡し、また都市を枯かつする原因となるのである。しかしながらこのことのうちに第二の波動や或いはアブノーマルな整理（均衡において防衛できるであろう位置の整理）の時期のいづれをも暗示する何ものも存在しない。ともかくいえることは、いかにしてコンドラチーフが不況や回復局面をもつのであるかという理由は明確になんら存在しないということである。シユムペーターは歴史的局面について、つねに四つの循環状態を

動かしているのであるが、しかしながら彼は、議論上不況および回復が理論的モデルの必然的な部分であるとは考えていなかった。というのはこれらの状態が少しでも出現するかどうかということは、歴史事実自体に疑問が存するところからそうように考えたのである。

このようにしてフェルス教授は、コンドラチーフにおける回復状態、および不況の形跡についての充分でない観察であるが、コンドラチーフは、只二つの局面をもっているようにシユムペーターの理論は、事実上保たれていると考えられるという。そうして第二のコンドラチーフとして一八四三年から一八六九年にかけての繁栄をとらえることができるし、そうして一八七〇年から一八九七年にわたる不景気を決定することができ、第三のそれとして、繁栄を一八九八年から一九二五年にいたる二七年間、そうして不景気は一九二五年から現在にいたるものとするのである。教授はこのようにシユマを変化させることによって、シユムペーター

一のシエーマを改良出来ると考える。けれどもその場合、何ものかを失うことを認識しなければならぬであろう。すなわちそれは、シエムベーターは、ジュグラーおよびコンドラチーフ循環の不況局面の併存によって一八七三年から七九年にいたる、そうして一九二九年から三三年にかけての厳しい不況を説明した。しかしながらもしわれわれがコンドラチーフ不況の存在を否定するならば、このシエムベーターの説明を放棄せねばならない。といってもこのことは、そう重大なロスではないように思われる。なぜならば両者のケースにおいてその不況の激しきは、特定環境の基底のもとに充分に説明されることができからである。ところでフェルス教授は、今一つコンドラチーフについて疑問が残存するという。すなわち、コンドラチーフは一般的に一つの循環に考察されることができからかどうか、言葉をかえていえば、景気の後退の極限は新しい繁栄に生成をなすしめる条件を創造するかどうかということである。今一度具体的にいえば、電気の発展は

特に鉄道の可能性の刺戟となつたか、同様に原子力の発展の時代は電気力の可能性が完全にとり入れられた場合によるものであるか。なるほどその仮設は稀に問題とされ、立証されることもできた。けれども、それはもっともらしいことであり、そうして又歴史事実合合理的によく適しているのである。

(四) キチン波動の場合についての批判

われわれは以上コンドラチーフ波動についてのフェルス教授の見解をみてきたのであるが、次にキチン波動すなわち四十カ月の短期波動について彼の所論をうかがってみよう。先ず最初に循環の多様性を期待するための三つの理由の(一)のみがこの四十カ月短期波動に適應するという。いわばその *gestation period* が相異なる *innovation* によってそれぞれ相異するところから、われわれは、ジュグラー循環の背後にまたがるより短期の循環を期待することができるのである。そうしてかような短期の循環は、繁栄や景気の後退状態をもつてであろう。しかしながらそれらの循環は、また第二の波

動すなわちアブノーマルな整理すなわち、不況および回復をもつのであろうか。なるほどもつということは可能である。しかしながらジュゲラー波動の回復および繁栄局面の間に起きるキッチン波動は、同様にアブノーマルな整理について価値があるという程に経験することではないのである。というのは、ジュゲラ波動はその方向において、なんらかの傾向を浸すであらうからである。したがってジュゲラーの下降局面 (downward phases) においては、第二の波動にとつての機会も存在しないはずだし、なお、アブノーマルな整理も存在しないはずであろう。このことからわれわれは次のように結論づけることができると思う。すなわち、期待は、キッチン波動のために一般的に四つの局面であるよりもむしろ、二つの局面でもって考察を可能とすると。

ところでシユムペーターは、ほとんどのジュゲラ波動の中に正確に三つのキッチン波動を発見することを主張したのであった。けれどもキッチン波動は、しばしば

ただその変動の割合においてのみ現れ、絶対的動向のうちには現れなかつたのである。しかしシユムペーターは、彼の理論を立証するためにこの点について、充分な論議の展開を試みていないのである。したがって、もしそれが充分に立証されることができないならば、きわめて疑しいように思われる。しかしながらそれらの事実が正当であると同様にジュゲラーにおける多くのキッチン波動も適応させることができる。けれども所与のジュゲラー波動のうちにいやしくも少しものキッチン波動を必要とするに及ばないということは有意義な観察である。事実、そのシエマは、広範な諸状態の変化に適すには、充分弾力性のあるものである。この弾力性は、三つの循環シエマを、うけ入れることをより容易にするものである。しかしながら歴史上のさほど重要でない循環は、真に innovation によって原因づけられていたのであろうか。シユムペーター自身はこれらの innovation が、いわば適応性のある変動であるかもしれないという意味でこの点について疑をはさ

んでいた。このような考察からしてフェルス教授は、後者の見解に自分は賛成するし、財産目録に特定の注意を払うべきであろうという。^{***}

以上われわれは、コンドラチーフ波動、キチン波動を通してフェルス教授のシムペーター循環理論の構造的問題に対する批判をうかがってきたのである。もちろんフェルス教授のこの論稿はワーバートン教授がいうように、^{***}ヒックスの貯蓄投資理論にもとずくところのシムペーター学説の総合にその企てがあった。

そうしてその総合的理論のトウルとして貨幣的要素を原因的役割とする認識に立つての総合であったことは、いうまでもないことである。しかしながらわれわれの現在の目的からすればその彼の総合的理論の過程を追って見る必要はないであろう。なぜならば本来この小論の目的は、いわゆるシムペーターの経済の発展の理論上の「信用」概念の位置づけをめぐって二つの問題設定（i）企業家はいかにして静態的条件のもとで必然的に生産手段を所有するにいたるか、（ii）銀行の創

造された信用がいかにして唯一の金融可能性をもつものであるという承認に到達することになるのか）にかかわるものであった。そのためにフェルス教授の循環波動の理論的具体な所論を紹介してみたのであるがもとより、これら二つの問題設定に対してシムペーター自体が何ら十分な説明をなしているわけのものではない。われわれがフェルス教授の循環シエマについての批判構想からうかがいしることができるよう、シムペーターがたとえ三つの解析的分析的シエマを定立するとしても、そこには重合、干渉が常に存在することによって四つの循環局面自体の構成的分類にも問題が存在するにいたった。このように考えてくるとシムペーターの経済変動理論自体の構造的論理性に性格的に秘みられた何ものかがあり、そのものからえんえきされる理論過程が必然的に循環シエマとなって現れ、そうしてその役割を果さしめるエレメントとして「信用」概念も生じるのではなからうかと考えられる。とすれば二つの問題設定はシムペーターにとつ

ては、すでに問題解決ずみのいわば論理上当然のこととして考えられるものであつたらう。しかしながらもしそのような論理の上に乗せられ承認済みのこととしてのみ彼には意にとまらないものであつたと仮定されるならそのことは、客観性をもたない主観的ドグマにおいてとめられたものといわなければならぬ。われわれはこのことからして、カルドアがというような経済体系上の循環的変動が経済生長の動態的過程に根本的に関連したものとしてなされてきているというそのことが一応一般的承認のもとにあるものとして、ではこの承認から考察されるシムペーターの経済変動の理論の構成的内容はどうであるか。そうしてその内容から考察された場合の二つの問題設定はどのように考えられるべきものであろうか。われわれはこのことにクピスをめぐらしてみる必要がある。そのためには、ワーバトン教授の所論が手がかりとなり案内役をつとめてくれる。

* ここでモデルというのは、すなわち明らかに周期的循環

景気変動理論についての一試論（浜崎）

の発生のために充分な条件および必要た行為を同時に提供するのに全く充分であるという總体的假定を意味する。
* *もし真にケインズの装置をもってしてのみシムペーター理論の発展があると考えられるならば、すでにそこにはシムペーター体系なるもの存在さえ疑問になつてくる。かえってケインズ経済学の体系的進歩が考えられることができてシムペーター体系の発展を期したことはならない。私が及ばずながら考えることは真にシムペーター体系の発展方向を願うなり、或る意味においては、体系自体にとつて、時代的学問的後退とすら考えられるかもしれないが、決してそうではなくいわずば経済均衡の構成的把握のための技術的構図を提供する方向へと発展してゆく可能性をもつものとして体系的価値をみいだすことが出来ると考える。したがつてこのようにシムペーター学説の発展、展開を考える私としては、前に紹介したフェルス教授のいわゆる種々な景気理論の四つの分類、整理にはいささか疑問をはさまざるをえない。この疑問については、私自身稿を新にして論議を展開してみたいと考えているのであるがこの機会に少しばかりの私見を述べておく。勿論それはシムペーターの『景気循環』の第二章から第四章にわたる根本的理論の展開をフェルス教授は一つの類型としてとりあげていることにかかわるのである。では果してこのシムペーターの理論的分折の方法が一類型として定立するに値するかどうか、この点に問題があるように思われる。ど

いうのは、シユムペーターの景気循環は「経済発展」が生起する統計的歴史の形態にはかならず、それはすぐれて歴史的な現象である。したがって景気循環の研究は、やがて資本主義的経済過程の歴史的研究を通じて、景気循環分析への接近方法は、歴史的とならねばならないものであった。このことを彼は一九三五年の論文『経済変動の分析』(『The Analysis of Economic Change,』*Review of Economic Statistics*, XVII: reprinted in *Readings in Business Cycle Theory*, Philadelphia: Blakiston Co, 1944)において先ず産業上の変動を成長の非周期的要因および革新に於ての外部的要因の結果に帰せしめることから論議を展開し、そうして決定的状態において作用する外部的要因を孤立化する手段として、景気変動の歴史的研究の必要を強く主張したのであった。そうして歴史的、統計的、分析的な研究方法の整序の必要を論じたのであった。また一九四九年の『景気循環分析への歴史的接近』(『The Historical Approach to the Analysis of Business Cycles,』 in *Universities-National Committee Conference on Business Cycles* (New York: National Bureau of Economic Research, 1951, pp. 149-62)においては、シユムペーターはいわゆる資本主義生活上の悩みの種である景気の低下と、景気循環のメカニズムおよびその局面である景気の後退との相違を強調し、そうして「景気変動についての考察は、周期的メカニズム自体に干渉することなくひき出されるものであ

る」(ibid. p. 150)として歴史的考察を要請する。このようにシユムペーターがともかく景気循環分析への接近の方法として成長、革新および擾乱要因を方法論上の武器として考えたにしても、それは常に均衡理論の立場において視野に入り、またそうであつてのみ彼の理論構成の根本的論理性が存在したと考えられる限りにおいては、彼の「歴史」概念も同時性の原理に立つ抽象的な「歴史」概念ではなからうかと考えられよう。このように考えられるとするならばフェルス教授が分類した第二の類型、すなわち、計量経済学者による構造的均衡体系としての景気理論の構成とどのように異なるのか、私には何ら差異をみいだすことが出来ない。若し何らかの差異をみいだそうとわれわれが努力するならばシユムペーターによってその構造的均衡体系の理論的論理性は静態、動態という対等した関聯において経済的事象をそれぞれ定立した所にあり、より具体的にそれらを把握する機軸を提供したところにみいだすことが出来るであらう。

フェルス教授の四つの分類についての批判からして私に前に真にシユムペーター体系の発展を願う方向規定が何であるかを問題としたことはいささか明らかになることができたともいえる。

* * * フェルス教授は、この「財産目録」という言葉はシユムペーターの索引には現れない言葉であるが、ハーバラ教授がシユムペーターの死んだ年に、シユムペーターはキッテン波動のために「財産目録」の仮定をうけ入れ

たと、自分に語っていると述べている。

**** Ibid. p. 511

Rendigs Feis attempts to eliminate objectionable features of Schumpeters innovation business-cycle theory and to synthesize the remainder with a saving-investment type of theory, particularly that of Hicks.

五、景気変動理論の構造的吟味

ところでシュムペーターの景気変動理論の分野は、いわば景気循環における経済体系の内部的要因としての企業者活動および革新についての関心と、経済史上の景気の沈滞・恐慌ならびにインフレーションに対する特定の原因的勢力としての経済体系の外部的要因への関心の両者である。そうして銀行をこれらの両者に位置づけを与え、しかも両部門において相異なる役割を演じるものとして考えられていることである。すなわち銀行を景気循環の革新の理論において *noninitiating* な必然的なしかも強調的な要因として認識されており、また他の外部的要因とともに深淵な不景気への周期的

後退の推移における、或は特発的変動 (*sporadic fluctuation*) における、いわゆる独立した原因的勢力としても認識されているのである。しかしながらこのようなシュムペーターによって、構想された原因的、強調的な要因の衝突を究明すること、あるいは分離することについて彼によってどのような方法的示唆がなされているかという点については、今迄充分な認識がなされていないことができる。このことへの接近は、われわれのもつ二つの問題設定へ近づく方途にもなりうるものでもあろう。したがってまずわれわれはシュムペーターによって運ばれたその方法的示唆を明るみにする努力に達まなければならない。

さてわれわれはすでにC・ワーバートン教授の論文は、著者の論述にしたがって一応紹介しておいた（「立命館経済学」第三卷、第四号）のであるが、このワーバートン教授の論文の目的は、まさしく右の目的にしたがうものであり、そのために著者はシュムペーターの景気変動理論の両部門における貨幣および銀行の役割

についてシユムペーターの著述を通して脈絡を概観し、
 そうして批判を試みるのであった。ともかくわれわれ
 は、この論稿をすすめるのに必要な限りにおいて、そ
 のワーバトン氏の所論に耳を傾けなければならない。

ワーバトン教授はシユムペーターの一九三五年の
 著「経済変動の分析」“The Analysis of Economic
 Change”および一九三九年の大著「景気循環論」

‘Business Cycles’の両者からいわゆる経済変動の要

因をとり出し、それにもとづいて次のように整理す
 る。すなわち「シユムペーターの景気変動の理論は、

(一)景気循環の理論、あるいは革新の勢力および企業者
 の活動が根本的な原因的要因として注目される景気の
 上昇振動、下降振動の回帰的交替の理論。(二)経済体系
 の反応から外部的要因へ生ずる経済的事情のなだらかな
 過程についてのいろいろな障得、および非常に変態
 的な不景気の理論、ならびにインフレーションについ
 ての理論である」と概念化することによって前者を
 「革新理論」(innovation theory) 後者を「衝動理論」

(shock theory) とよびそうしてそれぞれをいわば景
 気循環の理論、ならびに攪乱の理論とその性格を規定
 する。ところでわれわれは、前者すなわち「革新理論」
 は、シユムペーター理論の構造を問題とする場合つね
 に理解をもとめるところであるが、後者すなわちワー
 バントン教授がいうような「衝動理論」は伏せられが
 ちになることよって問題の視野に入ることがすくな
 かった。

このことが今迄のシユムペーター学説考察の欠陥で
 あったことはたしかである。しかしながらすでに「景
 気循環論」において「外部的要因はつねに重要であり、
 時にはそれは支配的なものでもあり、それらの外部的
 要因に対する経済体系の反応は、われわれが観察する
 経済変動についての主要部分を説明するためにつねに
 期待されねばならない」ものでありそうして「攪乱は、
 永久に経済的發展の周期的過程を抹殺するかのよう
 に非常に勢力的であるかもしれない」(“Business Cycles
 pp. 72, 256) ののであつた。このことは彼の遺稿で

ある「景気循環分析への歴史的接近」¹⁾「Historical

Approach to the Analysis of Business Cycles」において、
いはより具体的な問題となつてゐるのである。すな
わち経済生活における、すぐれていちじるしい変動は、
周期的変動の問題であるとしてよりは、国家的政策の
問題として認識されるものであり、「周期的な景気の抵
下の最も陰悪な性格、ならびにあらゆる階級にとつて
の妖怪 (Bogey) に景気循環を形成するあらゆる要因は
景気循環自体にとつて本質的なものではない」という
考を表明したのである。このようにみてくるとわれわ
れは、ワーバートン教授のいう「衝動理論」がいかにシ
ュムペーターの経済変動理論において重要な位置をも
つていたかをうかがうことはできる。そうして一方シ
ュムペーターが景気の不況、回復の周期的変動のもと
における作業として、因果関係の過程を観察し分析す
る場合に、彼が銀行の役割が景気事情の決定にとつて
貨幣的膨脹あるいは、収縮に応じて支配的であると論
じてゐる——いわばワーバートン教授のいう革新理論

の内容的展開——ことも充分明確化することができる

のである。しかしながらこの点については前節におい
てフェルス教授のいわゆる循環シエマに対する考察を
めぐつて考えてきたわけであるが、それ自体いくつか
の問題をはらんでいた。したがつてわれわれは再びそ
の議論をくりかえす必要はない。ただ、いまの場合問
題されなければならないことは、ワーバートン教授が
分類したところの「革新理論」と「衝動理論」とのい
わゆる二元的複合理論をもつシュムペーター体系が貨
幣要素の認識（特にいまの場合その衝動理論のもとに
おいて）をどのように処理したかということである。^{*}

ところでこの点については、われわれはワーバート
ン教授が、経済変動の外部的要因を二つのグループに分け
（一）貨幣的要因、（二）非貨幣的要因）ることによつてこ
れを反省したところに起点をおかなければならない。

まず教授はこの貨幣要因の重要性と彼の衝動理論との
認識については五つの解決の糸さえ与えられていない
問題が横つてゐるというが、^{*}われわれに今関連をもつ

ものとして看過出来ないのは、その第二と第四である。すなわち、

(一) 衝動理論は、景気変動の貨幣的諸理論にどのよう
に厳密に関連しているのか、このことは更に次の二
つの問題の解決をまつ。

(i) 不景気ならびにインフレーションの歴史的研究
がなされる時、多くの場合支配的であり原因的に
戦略的である外部的要因が性格的に結果とし
て貨幣であることになるのはどうしてか、

(ii) 適度の上昇・下降の交替にもとづく景気の後退
ならびに回復のリズムよりも、むしろひどい不景
気およびインフレーションに方向を与えている景
気変動の貨幣理論は、どのような程度であるのか。

(三) 銀行の活動は——銀行の作用ならびにそれらの機
会に衝突する外部的要因に対する反応において——
企業者前の機会有利さに関して因果的影響のよう
に振舞うということであろうか。このことからして、
シユムペーターの革新理論の本質的部門である革新

の群生、ならびに隆起において銀行の行為は、主要
な因果的勢力であるということができようか。

このような問題設定に対するワーバートン教授の態
度は、必然的にシユムペーターの論議から推論される
景気変動についての研究上の方法論の問題に逢着しな
ければならなかった。そうしてシユムペーターが循環
をいわば「歴史的個体としての循環」として把握する
ために歴史的作業としての三つのタイプ(すなわち、
(一)長期の統計的系列の展開、吟味。(二)分析的記述。(三)
産業的場所的モノグラフ)にもとづく方法論的武器を
みいだすことによって、そうしてこれらの三つのタイ
プが貨幣的勢力や銀行勢力にどのようにして集中化す
ることができるかを先ず考察する必要があるとして、
このことに努力をはらっている。^{**}

さてわれわれはいまワーバートン教授の詳細な所論
をいま紹介することは出来ない。ともかくもシユムペ
ーターの景気変動の理論は、衝動理論はおくとしても
二つの重要な理論的局面をもっていることは否定出来

ない。すなわちそれは (一) 発展の理論あるいわ資本主義過程の分析の理論であり、(二) 資本主義のもとにおける回帰的景気変動の理論がそれである。ところで後者はある観念からすれば、前者の一分野であるかもしれない。しかしながらけっして必然的な分野でもなく結果でもないことはわれわれがワーバートン教授のいう二元的分類から推して認識しうるところである。いわば後者は二つの仮定にもとづくものであるとしてシュムペーター体系上の理論的理由をもっていた。すなわち

(一) 企業者活動が、いわゆる「循環」として認識される景気変動の根源的な原因であるためには、全く不規則に作用しているということ。(二) 銀行組織の作用が起動的要因ではないとはいえ、その作用は、「循環」として認識される変動において強調的な要素であること。これらの二つの仮定がそうである。しかしながらこの二つの仮定自体に先ずもって弱点がひそんでおりまた、われわれが今迄論述してきたところから明らかにように、この仮定を支持する論証がシュムペーター

よって不十分なものとなされておるところから、景気循環論に対する最も重大な批判の一つとならざるをえないのである。

そこでワーバートン教授は、たとえこの仮設が廃棄されたとしてもシュムペーター学説自体は大修正を必要とすることをせずして保つことが出来るという。すなわちそれら二つの仮定に代って、「景気循環の分析学者によって記録された景気低下の殆んどが、単に深淵な不景気の暗黒な状態ではなく、銀行ならびに貨幣組織を連想した外部的要因の結果である——あるいは、より一層特殊的に貨幣的不均衡のうちに生ずる——とするその学者達の立場において仮定することである」と。すると企業者の革新的活動が、資本主義のもとにおいて、経済発展の躍動的部分であるという仮定は何ら廃棄される必要はないことになる。*** 只修正が要求されるのは、早晩革新の群生が銀行的・貨幣的組織の中で起っている勢力の不均衡の喪失においてとりあげられる場合のみである。けれどもそれは、景気循環を生

ずる傾向であるかもしれないが National Bureau のようなかような尺度によって同一視された景気循環の大きさの変動を生ずるのではない。この変動についてのシユムヘーターの景気変動の貨幣理論と彼の学説との間には何ら矛盾はないはずである。

* ワーバートン教授のように「革新理論」「貨幣理論」と明確にシユムヘーター体系を二元的契機においてとらえることが忠実な理解方法であるとされるならば、ワーバートン教授のこの論稿のみでは当然多くの問題を残すであろう。というのは、先づもってその「革新理論」と「貨幣理論」とのシユムヘーター自身による論理的交渉、及びその相互関係の論理的統一はどのようにしてなされるか、いわばその概念的規定の問題が残っているということが出来えよう、われわれはこのことは他の機会に問題としてとりあげるとして今の場合は、暫愛する。

** Ibid. pp. 512—513

「立命館経済学」第三卷、第四号拙著一〇八頁一一〇頁参照。

*** この三つのタイプといわゆる貨幣的要因との関連についてのワーバートン氏の詳細な叙述については、「立命館経済学」第三卷、第四号拙稿を参照していただきたい。

*** シユムヘーターは「われわれの理論は、かの貨幣制度や信用制度の世界に、景気回転の原因を探究するよ

うなものに属していないことは、殆んどなんらの強調を要しないところである。もとより購買力創造なる要因も、正にわれわれの見解に対しては重要なものであることは言を俟たない。それにもかかわらずわれわれは景気変動—それと共にまたこの種の経済的發展一般—が、信用政策によって影響せられ、なお進んで防止され得ることを否認するものではない」(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 2 Aufl., 1926, S. 342 Aum. 中山、東畑訳五八三頁註十五)とのべて貨幣的景気理論に属するものでないことを彼自身が拒んでいる叙述と全くこの場合関連して考えられるであろう。

六、あとがき

以上われわれは、ある意味ではシユムヘーターの景気変動に対する学説の内在的考察をもってこの小論を叙述してきたことができる。そのために、問題をしばって景気変動と貨幣要因との関連に限定して考察の方向を求めてきた。もとよりシユムヘーター学説は均衡体系を基底とする論理的道標があり、そのことからする欠陥、弱点、あるいは理論的図式の抽象化、方法的斉一性ということが自らこの小論において指摘

された面にもあらわれざるをえなかった。例えば「信用」の概念にしても、またそれにもとづく景気変動と貨幣要因との関連にしても、もしそれが経済動態の歴史的過程を分析し、説明するものであるならば当然、そこには理論的統一原理が概念的に存在しなければならぬ。そうしてその統一原理自体が理論的検証の過程を経ることによつて歴史的な客観的な性格をもつていたるのである。しかしながらシユムペーターの理論の道行の背後にはそのことは「統一原理自体」すでに承認を終えられたものとして、いいかえれば前提与件として理論に入りこんでしまっている。といつてこのことがシユムペーター体系自体の致命的な欠陥であるとは、私は思わない。フェルス教授がことさら四つの形態のみに数えることによつてシユムペーターの変動理論を評価しているように（そのこと自体には問題が存すると思うが）理論的構造の建方自体は価値あるものと考えられよう。ようするに、例えそれが、フェルス教授のようないわばヒックス的な理論的綜合化による

シユムペーター学説の發展化であるにしても、シユムペーターの貨幣的楔機の導入化ということに未だ解かれない問題が残るであろうし、そうしてワーバートン教授の修正化が当を得たものとしても、そこには、彼のいう「革新理論」と「衝動理論」とのシユムペーターによる相互関係の「図式」はどのようなものであるのか、また貨幣的、銀行的作用は、それら両者に内容的にどのような形でとり入れられているのか。そうしてまた景気変動のシエマに対してどのような機能的効果をもたらしているのか等の具体的な問題が、今後充分な私たち論議されなくてはならないのではなからうか。